



連載「必修」英語のマネジメント入門2 英語活動 リサイクルを！（出版前原稿， Post-print version ）

著者	竹内 理
雑誌名	「必修」の授業で役立つ活動プラン
ページ	76-77
発行年	2007-06-05
権利	(C) 明治図書出版株式会社； このデータは明治図書出版からの許諾を得て作成しています。
URL	http://hdl.handle.net/10112/6952

連載:「必修」英語のマネジメント入門 2 英語活動リサイクルを!

(出版前原稿 (Post-print version))

関西大学教授 竹内理

はじめに

今回は、英語活動のリサイクルという考え方を提案してみたい。多くの小学校ですばらしい英語活動が展開されているが、その記録はどの程度残っているのだろうか。また、記録が残っていると、他の先生がたが利用しやすいように系統的に整備されているのだろうか。たくさんの時間と労力を費やして、1回限りの授業で終わりというのでは、あまりにももったいない。すばらしい授業はみんなで共有し、発展させていくべきなのである。今回はその具体的な方法について検討してみたい。

残して意味があるの?

「必修」になると、教える内容にある程度のしぼりが入り、教え方についても一定の指針が示されるであろうから「今やっている独自の英語活動を記録に残してもあまり意味がないのでは」という声も確かにある。しかし、筆者は大いに意味があると考えている。その理由は、たとえ「必修」化されたとしても、今までやってきた内容や方法がそんなに大きく変わるはずがないからである。小学生の認知的・社会的発達の度合いが、英語の「必修」化にともない劇的に変わるわけがないのだから、それらの度合いに合わせて十分に練られてきた題材や教え方も、大きく変わることはありえないはずである。したがって記録を残してもムダになるのでは」という声は、紀憂にしか過ぎないと言えよう。

リサイクルの考え方

さて、この記録だが他の先生がたが再度利用できるように残せばその価値はもっと高まっていく。これがリサイクルの考え方である。たとえば、昨年の6年生で行われたある英語活動の授業がすばらしいものであったとしよう。同じようなことがしたいと思ったのだが、おぼろげな記憶しか残っていない。担当された先生は他の学校へ転出され、既におられない。6年生の別のクラスの担任だった先生はおられるが、その先生は別の内容の英語活動をされており、活動が共有されていなかった。こういったことは日常茶飯事のように学校で、起こっている。

ここで、たとえば授業を記録したビデオが1本残っていたとしよう。また書類のファイルから教案が出てきたとしよう。もうこれだけで、その授業の内容と方法を確認することが可能となってくる。もちろん、よく言われるように「授業は生き物」であり、クラス内の人間関係、児童の性格などに影響されて活動をまったく同じように再現することはでき

ないかもしれない。しかし、ここに昨年の担当者の授業メモが残っていて、何が問題点で、何が促進要素であったのかが判るとしたらどうだろうか。すばらしい授業を再現するための資料がさらに整うことになる。加えて、ビデオに時間のインデックスが付いており、教案や授業メモとの対応関係が分かりやすくなっていたらどうであろうか。あとから授業をおこなうものにとって、これほどありがたい資料はないはずである。

何を残せばよいのか？

では、どのような資料を記録に残していけばよいのであろうか。筆者は、これまでの観察から、以下のようなものが必要だと考えている。

- ア) 教案(含む評価のポイント)
- イ) 授業で利用した表現・語彙などのリスト
- ウ) 授業で使用した教材やテープ・CD
- エ) 授業の様子を録画したビデオ
- オ) その授業の問題点や児童の様子を記録したメモ
- カ) 授業を組み立てる際に参考にした書籍

このうち、ア)からエ)までが揃っていれば、昨年の授業の(表面的な)再現が可能となり、オ)とカ)があれば、今年のクラスに適した展開や、さらなる発展が模索できることになる。これらすべての資料を整えるのが難しい時には、最低でもウ)とエ)を整えておけば何とかなるであろう。

どのように残せばよいのか？

英語活動のリサイクルを効率的におこなうために重要なもう一つの点は、どのように資料を残すのかということである。資料を単に置いておくだけでなく、活用しやすくなるように加工・整理する必要がある。ある学校で行われている例を紹介すると、資料室に、学年ごとに区分けされた(中味の見える透明の)衣装ボックスがたくさん置いてありそのそれぞれに1単元(あるいはそれに相当する一連の流れ)分の資料が保存されている。さらにその中には、紙製のファイルボックスが授業回数分だけ入っており、それぞれに1回の授業用の資料一式(教案、ビデオ、教具、音声テープ、振り返りシートの原版とデータファイル)が詰まっている。授業で使う歌のテープは一連の授業で共通して使うものであっても授業回数分複製され、それぞれファイルボックスに保存されている。このおかげで、実際の授業に出かける時は、ファイルボックス1つを下げれば良いようになっている。さらに、衣装ボックスやファイルボックスの表面には、たとえば「6年生・3学期・卒業メッセージ・4回分」のように、見えやすいように大きな字でキャプションが添えられている。

もう一工夫

これだけでも十分にすばらしいのだが、さらに筆者からの提案として、改善ポイントを

書き込む加除式のノートも各衣装ボックスに用意してもらっている。このノートには、授業を実施してみて感じた問題点や新しいアイデアを追加してもらうことになる。毎年、英語活動がリサイクルされて、誰かの経験がオリジナルの授業に追加され、次の年の授業が豊かになる。昨年度の先生の努力にただ乗りするだけでなく、自らも新たな提案をしていける。こんな体験を補助するツールに発展してくれることを祈りながら、ノートの行方を見守っている。

おわりに

上述したような方法で蓄積された資料一式があれば、中心となって推進してこられた先生が転勤されようが、退職されようが、英語活動は確実に発展していくはずである。また、新しい先生が他校から転入されようが、新規で採用されようが、すぐに担当してもらうことも可能となる。このように今までの授業記録は、来るべき「必修」の時代においても、その輝きを失うことは決してないのである。

参考文献

竹内理 2006.今こそ学級担任が主導する時『小学校英語セミナー』20号 pp.6-7.